

南北戦争前のアメリカにおける「母」礼讃現象と 「父」の位置：セオドア・ドワイト『父の本』 (1835)をめぐって

野々村， 淑子

九州大学大学院人間環境学研究科教育社会計画学講座：講師：教育文化史

<https://doi.org/10.15017/966>

出版情報：大学院教育学研究紀要．2， pp.69-91， 2000-03-31．九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース

バージョン：

権利関係：

南北戦争前のアメリカにおける「母」礼讃現象と「父」の位置

—セオドア・ドワイト『父の本』(1835)をめぐって—

野々村 淑 子

【構成】

はじめに

I. セオドア・ドワイトと『父の本』

1. セオドア・ドワイト
2. 『父の本』の特性
3. 『父の本』の構成

II. 「父」であることへの拘泥

1. 「リスペクタビリティ」の証しとしての「父」
2. 「家庭」にいる間の「父」の役割
3. 「家庭」にいない間の「父」の役割

III. 「息子」の「教育」という主題

1. 「有用な市民」と「神の僕」
2. 「男らしさ」をめぐるジレンマと「父」と「息子」の絆の強調

IV. 「愛による教育」と「父」の脆弱性

1. 「愛」への全面的信頼と「父」の不確かさ
2. 実際活動における「母」への委託

おわりに

はじめに

19世紀初頭, すなわちアンテベラム期(南北戦争前の時期)のアメリカでは, 子育ての場面における「母」の役割を礼讃し賞賛する言説が, 猛威を振るっていた。それらの言説が織り成す表象の世界は, 『母の帝国』と称されるようなものであった⁽¹⁾。本稿で分析する『父の本:あるいは, キリスト教国家に相応しい原則の基づく若い子どもたちの管理と教育についての提案』(*Father's Book; or Suggestions for the Government and Instruction of Young Children on Principles Appropriate to a Christian Country*, Springfield, G. and C. Merriam, 1835)⁽²⁾は, このような時代にあって, あえて書かれたものである。以下に掲げる「序」の文にみられるように, ドワイトは, 「子ども」の「教育」とい

う重要な仕事を、「父」は、自らのために、そして国家のために、看過してはならない、と呼びかけたのである。

現在のところ、子どもの世話 (care) はそのほとんどが母親に任されている。しかし父親たちは、自らの義務や影響力を軽視してはならないのだ。自分の子どもたちに対して、身体的、知的、道徳的かつ宗教的な教育 (education) を全て成し得る人はそれほどいないであろう。自らの特有の仕事の重要性について考えたとき、また自らが無視してきたことによって引き起こされた多くの不適切な影響を顧みたとき、父親は、自分の子どもたちのために、新たな努力を為さねばならない義務があるということ、を、認識するはずなのだ。(『父の本』序、Ⅶ)

本稿は、アンテベラム期における「父」への稀少な助言であるこの『父の本』の言説を分析することによって、当時の男性が、「父」という役割を前にして、いかなる議論を組み立てようとしたのか、を明らかにすることを目指している。しかし、あるべき「父」を論じ、ともすると自分の仕事にかまけてその役割を放棄しつつある父親たちに教化しようとしたこの『父の本』は、さまざまところでその言説にずれやゆらぎが現出し、「父」はその脆弱性を露にするのである。

アンテベラム期は、産業化、都市化が進みつつあり、人々の暮らしや家族のあり方が急速に変わりつつある時代であった。男性は、産業構造変化に伴う職住分離化によって、「家庭」からその「仕事場」が引き離され、更に当時喧伝された「男女の領域分離主義」によって「(市場や議会などの公的な)仕事場」を自らの生きる「領域」とすることが要求されていた⁽³⁾。また、独立革命の基盤となった共和国思想において強調された「共和国の母」の観念(「共和国市民」を育てる「母」の役割こそ、女性の政治への関与の積極性を見出そうとする考え方は、「家庭」における女性の「母」役割の重要性を人々が認知し、自覚しようとしていく地盤を用意していた。あるいは、産業化、都市化によって世俗化が進む社会に抗して、宗教界が復権をかけた第二次大覚醒運動の隆盛は、キリスト教福音主義に基づく「クリスチャン・ホーム」の再建を願う意識を、人々のなかに呼び起こした。「クリスチャン・ホーム」を守る「母」の役割が、熱狂的な集会において、教会の説教の場で、そしてパンフレットや書物において強調されたのである。以上のような経済的、政治的、宗教的な動きと並行して、医学界においては、女性や子ども、特に子どもを産み育てる「母」、「母」となるはずの女性の身体への関心が高まっていた。子どもへの関心は、当然のことながら教育意識の変容と連動していた。植民地時代に支配的であったピューリタンによる厳格な子育て意識においては、極度な早期教育に対しても抵抗感がなかった。医学的見地や教育理論によって、子どもの発達段階や発達のバランスなどが自覚化されるに従って、幼い子どもの養育に関する「母」への助言が数多く書かれるようになったのである⁽⁴⁾。

アンテベラム期の『母の帝国』という表象の世界は、このようなさまざまな動きのなかで成立した。「家庭」における子育ての領域は、「母」、つまり女性のものとなりつつあったのである⁽⁵⁾。「女性の領域」である「家庭」のなかで、「父」として存在しようとするのは、どのような意味をもっていたの

か。それは、いかなる可能性を見出しえたのか。あるいは、いかにしかありえなかったのか。

本稿の分析は、この問いから出発している。上に引用した、ドワイトの「序」の言葉には、「母」に占領されそうになっている「家庭」において、なんとか「父」の権威を取り戻さなければならない、という切羽詰まった危機意識が滲み出ている。それは、「妻」に対して自分の権威をかざそうというような意識ではない。『父の本』の全体を通して、少なくとも言説上においてそのような意識は全く見られない。そこにみられるのは、将来「共和国の市民」となり、また「有用でリスペクタブルで勤勉な労働者」となるべき「息子」を「教育」するには、われわれ「父」がその義務を全うしなければならないのだ、そしてそのような「父」であることが、「リスペクタブル」な男性の要件である、という意識である。

独立革命後四半世紀を経ていたアンテベラム期において、家族のあり方、家族構成員同士の関係の仕方は、急速に転回をみせはじめていた。植民地時代に支配的であったピューリタンによる家教化書が有していた家父長制的なヒエラルキー、すなわち、「妻」の「夫」への、「子ども」の「父」への、「使用人」から「主人」への服従、そしてそれら三本の線が「家長」の「神」への服従という一本の線で纏め上げられるという家族のあり方が次第に衰退をみせつつあったのである。そこにおいて、男性は、「父」をどのように「再定義」⁽⁶⁾しようとしたのだろうか。

ドワイトの『父の本』において、それは、「家庭」にいるときもいないときも、常に全てのときにわたって「子ども」の「教育」に執心し、心を砕くような「父」のあり方である。それは、ほとんど「強迫的」⁽⁷⁾といえるような危機意識を伴う。その危機意識は、まずは「共和国の市民」となるべき「息子」の教育が「母」任せになっていることに対するものとして語られる。しかし、そのみではない。そこにあるもう一つの危機意識とは、「母」の養育が優勢となっている子育て文化のなかで、当時の性別分離領域主義によって規範づけられている「男らしさ」というものが「家庭教育」のなかで位置づいていないことへの違和感であった。それは、「父」が「男らしさ」において「息子」の模範とならなければならないという意識に結びつく。しかしながら、「父」による「教育」として語られる様態やその叙述内容において、「父」はその脆弱性を露にするのである。このことは、『母の帝国』とも称されるほどの「母」優勢の育児文化のなかで、「父」はその座を保つことが困難な状況にあったことを示していよう。

1. ドワイトと『父の本』

1. セオドア・ドワイト

セオドア・ドワイト (Dwight, Theodore, 1796-1866) は、超フェデラリスト政治運動家の息子として生まれ、叔父である回衆派神学者ティモシー・ドワイト (Dwight, Timothy, 1752-1817) が学長をつとめていたイエール大学に学んだ後、父の政治活動新聞活動を手伝いつつ、作家、故郷の教師として名を残した人物である。教壇に立つ傍らで、作家としてのみならず、編集、翻訳なども手がけた。大学卒業後教職に就くまで遊学していたヨーロッパ各地の言語に堪能であった。フランス語、スペイ

ン語、イタリア語は完璧であり、ドイツ語、ポルトガル語、現代ギリシャ語にも通じていたという。ニューヨークの公立学校に声楽 (vocal music) を導入したことで知られている。『父の本』の他には、旅行記、ギリシャ語の教科書、学校教師への助言書、郷土史などの著作が残されている⁽⁸⁾。

2. 『父の本』の特性

アンテベラム期に「氾濫」した「家庭的著述 (domestic literature)」における「母」礼讃現象を分析したライアンは、この『父の本』をアンテベラム期の「家庭的著述」の「氾濫」の第一波のひとつとしてあげている⁽⁹⁾。この第一波とは、19世紀初頭まで慎ましく印刷されていた、ピューリタン聖職者によって書かれた説教調の家教化書にかわって、大衆向けに出版されはじめた最初の助言書群である。これを担ったのは、主として聖職者や教師などの地域の有力者である男性であった。彼らは、ピューリタンの家教化書の伝統を継承しながらも、口語体で親しみやすい文体でその助言を書くことで、大衆読者の意図を汲もうとした。あるべき「家庭」像の教訓を伝授するという使命は先人に倣いつつも、近代的読書空間の市場における読者との関係を心得ていたのである。しかも、その内容は、かつての家族関係論と家の管理の在り方とは全く異なるものであった。

ピューリタンの家教化書が説いた家族関係論は、「妻」の「夫」への服従、「子ども」の「父親」への服従、「使用人」の「主人」への服従を軸に、家長がその家の人間関係を掌握し管理し支配すると共に、家長の神への服従によって、神の国において各々の家族が支配されるという統治の形を有していた。しかしながら、アンテベラム期の第一波の書物では、家長支配という家父長制のヒエラルキーが排され、「子ども」の教育において「父」と「母」が協力し、何よりも「幸福な家庭」づくりを目的とした助言が、その中心をなす。

『父の本』が、このような性格の本であることは、以下にみるように間違いない。それは、かつての家父長制家族のシステムが壊れた後の、新たな「家族システムの確立」(207:引用の後の数字は『父の本』の頁数)と、それに不可欠な新たな「父」の仕事の規定を目指した書物なのである。

ドワイトが、大衆読者を意識しているのは明らかである。本研究で分析した第二版では、所々に、前年に出された初版に対して寄せられた反響と、それに対する自分の意見を載せている。再考の上、意見を改めたと書かれたところもある。だが、この『父の本』は、第二版のみ、その後の重版はなかった。女性作家たちの書物に比べて、その売れ行きはさほど芳しくなかったのである⁽¹⁰⁾。しかしながら、この書物は、アンテベラム期の「家庭的著述」の「氾濫」現象において、重要な位置を占めている。

『父の本』は、「母」礼讃言説が「氾濫」したアンテベラム期において、「父」の役割を助言した稀少な書物として、子ども史、子育て史、育児書の歴史などの研究において数多く言及されてきた。しかし、子どもの教育という仕事に「父」も少しは自覚をもって取り組もうではないかというその口調から、かえって「母」の影響力の大きさを証言してしまうことになるためか、あるいは、アンテベラム期の「父」というものへの歴史研究者の関心が薄かったためか、これまでの研究においては、はっきりとした位置を占めてはこなかった。

最近の男性史研究の深化によってなされた19世紀の「父」の歴史についての研究⁽¹¹⁾においては、

『父の本』は中心的に扱われている。しかしながら、そこにおいては19世紀の「父」も限定的ではあれ、その役割を果たしていた、という過去の経験、実際の父のあり方の歴史を掘り起こす前段としておかれているため、『父の本』に関する言説の構造分析とはなっていない。アンテベラム期の「父」についての言説が、当時の男性によっていかなるパースペクティブをもって、何を論じようとしたのか、そして何を論じ得なかったのか、つまり言説の生成とその分断の軌跡をみてはいないのである。

しかし、この19世紀の「父」に関する最新の研究において、その助言書分析の章では、『父の本』が他のどの書物よりもまず筆頭に掲げられ、他の箇所においてもその分析の量や言及の頻度が最も多いということは、この書物の重要性と歴史的意義を物語るひとつの証言である。

3. 『父の本』の構成

この書物の題名には、先に記したような長い（といっても当時としてはそれほど奇異なことではないが）副題が付けられている。『父の本』といっても、これはこのような主義原則のもとに書かれたものであるという立場の表明がなされるのである。表紙の見開きには、右側にこの題名、そして左側に、可愛らしい「子ども」たちと朝の散歩を楽しむ紳士、「父」の姿を描いた挿し絵が載せられている。この絵は、この書物で望ましいとされた立派な品格を備えた愛情あふれる「父」の姿を十分に物語るものであるといえよう。



さらにこの頁をめくると、「序」の前に、これもまた長々とした献辞が添えられている。

愛国心、知性、健全な判断力と、キリスト教の原則を備え、我々の市民的、社会的、宗教的な制度の永続性と、我々の国の幸福と繁栄が、本質的に委ねられているアメリカの父たちに捧げる

「序」のあとには、詳細でそれをみただけで内容が把握できそうな目次がある。以下の通りである。

	頁
第一章 若い父親	13
若い父親—経験をもち、教えることができる人に相談しないことによる、良い教育の原則についての無知—あなたにとっての教育のシステムとは何か?—質問	
第二章 教育の原則	21
教育についての最良の原則を採用するための我々の機会—一般的な無関心—機会をとらえるための考え—拒否されるべき誤った原則—子どもたちの利益のために設えられる家のアレンジメント—家の設計と建築—家具—これらの点、あるいは服装などにおける良い趣向の影響—父のための質問	
第三章 幼い子どもたち	33
幼い幼児の扱い—子どもがとても幼い間の父に相応しい反省と学習—泣くこと—不適切な興奮—幼い子どもたちの落ち着きの無さと感情の高ぶりへの対処の仕方—しつけにおける第一段階—キスによる要求の表示—逸話—早期の言語—心の中を表現する方法の重要性—サイン—逸話	
第四章 子どもたちの健康	42
子どもたちの健康—望ましい人間の身体と薬についての若干の知識—良い食物の体系、体操、早起きなどの健康を保つための最善の方法—養生法—身体と精神の健康に相応しいさまざまな体操	
第五章 宗教教育	52
何歳から始めるか?—それはどのようにもたらされるべきか?—模範の重要性—早期宗教教育の可能性を証明する逸話—それをなすべき理由	
第六章 宗教教育(続)	66
人間哲学の重要性と利益—われわれ自身の身体についての知識—全ての自然史に優越する魂についての科学など—知性の始まり—宗教教育を始める時期についての誤った意見—キリスト教の根本原則を早くから始めることを勧めるひとつの方法—宗教を教育する際の親の責任	
第七章 安息日の家族	79
父の息子との朝の会話—祈りと聖書についての学習—宗教教育の原則—子どもたちのための日曜日の義務—学校—教会	
第八章 遊び、スポーツ、娯楽と体操	97
それらは、できる限り有益なものと結びついていなければならない—興奮するような遊びは避けること—有益な原則と結びついた尻上げ—避けられるべき偶然的なゲーム—子どもたちのための小さな機械的な、あるいは農作業用の道具—家畜家禽の世話—養成されるべき人間的な心—残酷な野外スポーツに代わる、自然史、絵画についての知識—歩くこと—乗馬—学校での誤った扱いによる	

	健康への被害	
第九章	娯楽（続） 有用な労働の才知—有用な技術の習得—器楽—笛づくりの職人を訪問した少年の話—手工労働	108
第十章	家族管理 子どもたちがもっている知識—言葉を知らないことや短気などについての許容—体罰—一般的な罰—規則的な時間と習慣—若い男性の危険—予告的な警告	119
第十一章	知的教育 教育は早くに始まっている—家庭教育の重要性、特に中流層という社会のなかで最も分別のある階層にあって、それを成し遂げる我々の能力—食卓での会話における父の教育—水の驚異—他の主題	131
第十二章	知的教育（続） 一般的な会話—会話のなかで守られるべき点—家族の書棚におく本—除かれるべき不純で軽薄な作品—小説—教育における偉大なる目的—父が子どもの教育のために書くこと—良い詩や散文を暗記すること—地理や自然史、芸術、日常生活などについての家庭教育—子どもの作文や雑誌など	145
第十三章	社会、その教育への影響 我々の国における社会の状態によって現われた優越性—公的な儀式—教育の日々—子どもたちの発表会—知的で有徳なキリスト教徒に相応しい儀式—学術的な社会を創るにあたっての父親の義務—尊敬のされ方—近隣の人々への愛—些細な嫉妬心—社交関係—日曜学校や宗教、慈善団体の家族への影響	161
第十四章	音楽、礼儀正しさ、時間に正確なこと 家族のなかでの音楽教育—楽しみの源であると同時にしつけと教育の手段としてのその重要性—声楽教育についての自然の後押し—ほとんど全ての子どもたちが歌を学ぶことができること—喉の音楽的仕組み—有用で裕福な後援者のについている歌唱学校—子どものための器楽—礼儀正しさについての誤った考え—良いマナー—実用的な訓練—組織だった慈善—模範—例証	171
第十五章	さまざまな話題 システム—正直さ—借金を払うことについての厳守—独立心—例証—裕福な親への警告—簿記—役所—使用人—子どもたちを怖がらせること	184
第十六章	学校 近隣社会の平和と良き秩序の重要性—公立学校に子どもをいかせること—そのときの父の義務—学校の設立と運営に関して観察するときの一般的原則—教えるべき教科と教え方の原則—飾り物的な教科—管理と教育の様式—学校で興	200

味関心を引き出す方法—ライセウム—結論

以上である。声楽を取り入れた学校の宣伝も織り込みながら、「家庭」における「父」に対して、多くの要求を行っているのがわかる。この目次を一瞥して我々の注意をひくのは、第三章の幼児教育の部分であろう。泣いたり落ち着きが無かったり、という幼児を如何に手なずけるか、についての助言が、詳細かつ具体的になされている。それは、チャイルドやシガニーたち、つまり女性達の「母」向けの助言と同じくらい、あるいはそれ以上の細やかさを有している。しかも驚くべきことに、「キス」が、大いなる威力を持たされているのである。この「愛」への無抵抗な信頼が、この『父の本』の基調をなすものといっても過言ではない。

では、以下に分析を試みてみよう。

II. 「父」であることへの拘泥

1. 「リスペクタビリティ」の証しとしての「父」

第一章の「若い父親」は、その章題の通り、結婚したばかりの男性たちに、「父」であることとはどのように重要であるのか、いかに「父」であるべきか、を熱っぽく語ったところである。

新しく結婚した男性たちに、私は友人として忠告しよう。彼はまずは、調和と知性と洗練さをもった住まいを持つことに関心を抱くであろう。これは、彼の幸せに必要なものであり、彼の人生の有用性とリスペクタビリティ〔傍点引用者、以下同様〕に大いに関係するのである。それらはまた美德が自然に流れ出した結果であり、ある良きもの〔子ども〕がその屋根の下での教育を授かろうとする保証であると同時に、彼自身が授かってきた教育の良さの証拠となるものでもある。

マナーや態度や会話などに関することは、夫と妻がお互いに学びあうことである。結婚前の彼らの状況がどのようなものであろうと、それぞれが、身につけるに値すると思う習慣や意見について寄り添うことは一般的なことである。…

その上で、若く愛情深い (affectionate) 夫には、彼自身の性格を向上させるような新しい動機が生まれたのだということを、ここで示さねばならない。それは、その期待を全て彼の手に託している彼の妻の幸福である。彼の、人生におけるリスペクタビリティと有用性のために、彼が自分自身を吟味し、自らの失敗や失策を確かめ、すぐにそれを直すための毎日の仕事を始めることが要求されるのだ。彼が、自らをよりよく管理すればするほど、ますます家庭において適切な支配力を発揮し、また外の世界においても有益な影響力を及ぼすことができるようになるのだ。

尊敬に値する人を味方につけ、他者の信頼を得ることは、彼が従事するどのようなビジネスでも、その成功に不可欠なことである。

自己管理 (self government) のもっとも重要なひとつのあり方は、富や顕示欲に対しての、我々の欲望や期待を緩和することができることである。多くの家族が、父がこの徳を欠いているために破滅している。また、更に多くの家族が、同様の原因で、他のさまざまな被害を被っているのである。家族の財産や平和、有用性やリスペクタビリティに関わること全てが、彼らが自分たちの収入にみあった生活をしているか否か、ということできまるのだ。
(15~17)

自らの、そして家族の「リスペクタビリティ」と「有用性」が、当時の男性の人生、生活にとって何よりも重要であったということを、この言説から読み取ることができるであろう。

「有用性」とは、Ⅲにおいて詳しく見るように、「息子」に備えさせるべき美德として、この『父の本』において「リスペクタビリティ」と共にかなりの頻度で言及されている。それは、「有用な市民」あるいは「有用な労働」「有用な技術」といった使われ方がなされている。つまり、これこそが、「市民」あるいは非手工的な「ホワイトカラー労働者」として、共和国と産業社会のなかで、その一員としての役割を果たすべくして、「中産階級」の男性たちに要求された美德なのである。何になるかわからない、しかし社会のなかで「役に立つ」、つまり「有用な」人間にならなければならない、これが、当時のあるべき男性像の鍵概念であった。

「リスペクタビリティ」とは、「尊敬されうる (特性)」あるいは「市民的価値観」と訳され、近代市民社会が成立し、存立していくうえで大きな機能を果たした特性である。それは、「伝統的身分が社会的評価をくだす基準として、それほど有効でなくなったより一層変動しやすく不安定な社会における、そうした基準として富に代るものを提供した」といわれる⁽¹²⁾。

この「有用性」と「リスペクタビリティ」という徳を備えていることで男として認められるアンテベラム期の男性たちにとって、「父」であることは、その双方を持っていることの証しであり、それを適えてくれる格好の機会であった、ということができる。若い父親たちに向かって、自問するように呼びかけたこの一章の最終部分は、このことを更に強固に確証するものであろう。以下が、その自問の内容である。

いかなる目的で、この子どもが私に与えられたのであろうか。これから何が可能なのか。多くの子どもたちが、そうであるべき程に良くも賢くも幸福にもならないのは何故か。もし私が異なった仕方で教育されたとしたら、より賢く、より良くなっていただろうか。もし子どもをより良く教育しようとするなら、子どもたちや妻や友人や隣人たち、見知らぬ人々や、社会の制度、神に対する、また知恵や気質や言語や習慣や宗教に関する、父の性格と行動はいかにあるべきか。

私は何について最も欠陥があるだろうか。私の子どもにそのような欠陥が影響するとしたら、それは何であるか。彼らはいかにして正しくなるだろうか。私が家族に自分の義務をよく理解させることができないのは何故か。私はいかにして彼らをよく知ることができるだろ

うか。子どもへの関心は、私の役割を正当化するだろうか。そして、〔父の役割を果たすという〕偉大なる犠牲を払うことを自らに要求できるだろうか。家庭についての手筈において、何が主たる目的として目指されなければならないだろうか。私の仕事のなかで何が、私を子どもたちにとって無関係な人（stranger）とさせるほどのものになっているのか。子どもの教育をするのに、父の手助けをしてくれるほどの有用性を、社会は与えてくれるだろうか。（19～20）

2. 「家庭」にいる間の「父」の役割

「父」がなすべき自問集のなかでも触れられているように、仕事のために家から離れなければならない「父」は、「子ども」にとってはよそよそしい関係を強いられている。これこそが、ドワイトが「父」の危機としたことであった。そこで、この『父の本』では、できる限りの「父」としての子どもとの関わりを持つように助言する。家にいない、といっても全くいないわけではない。朝、夜、そして仕事が休みの日曜日は、「父」はその全力をもって子どもと関わることができる時である、というのである。

表紙に掲げられた絵には、「朝の散歩」の様子が描かれているが、散歩は、健康維持にとってよいばかりではなく、自然についての科学的知識や美的才能を開花させるためにも重要なことであるといわれる（105）。

「食卓での会話」は、「家庭」の書架と共に、「父」が授ける「知的教育」のなかで、最も重要な意義を担っている。「知的教育」についての第十一章および第十二章における助言の、主たる「教育」の場は、この「食卓での会話」である。「食卓での会話のなかでの父による教育」（135）「食卓において湧き上る父自身の自問」（140）が、イタリック体で特別に項目立てがなされるほど、これは重要な機会であり、場なのである。そこでなされる「教育」の内容は、端的に「有用な事実（useful fact）」（135）と断言されている。しかし、この「食卓」という場は、ただ何かの知識を教えるだけの場ではない。

良き父親が食卓にいると想像してみなさい。祈りの言葉が、その荘厳さのなかで、真に感情的な調子と言葉によって発せられる。家族が、その必要な量だけの食事をとることができたことに感謝の気持ちをこめて。北部のアメリカでは、あまりにも速く食事をすませしまう人が多い。そのように時間を節約することには何のメリットもないのだ。…父は、食卓においてなされる会話と行いを、聖書に学ぶべきである。…様々な〔売買契約の話や、日常生活における失望や恐怖や困難についての〕話題は、子どもの前ではしてはいけないのだ。たとえとてもしたくなくとも、彼は他の話題を探すべきである。何が有用な事実であり、また何が他の人によってなされた信用されることであるのかということを考えるべきなのだ。…（136～137）

神の前での厳肅さを保ちながらも、ここで描かれたものははりつめた緊張の場ではない。あくまで、それは、「神への感謝の念」を忘れずに、しかも様々な知的好奇心を子どもたちに起こさせるような明るく楽しい「食卓」である。そこでなされる「会話」は、自然現象についての科学的知識や、地理的な知識、あるいは動植物の生態などの多岐にわたるものである。「父」は、自分が知らないことに、子どもの関心が及んだ場合は、それに詳しい友人や本で調べてくることを約束したりもするのである(139)。夕刻の「炉辺の語り」も「食卓」においてと同様、宗教と知的教育において有効な時間である(143)。

仕事に行かない日曜日、つまり「安息日 (Sabbath)」の「父」の義務は、第七章に具体的かつ詳細に、助言される。「安息日」とは、「一週間の他の日から、神の創造と復活とを同時に祝福するための、人類の歴史のなかで最も偉大で最も幸福な出来事である」(80)。第二次大覚醒運動の極まるアンテベラム期は、安息日改革運動が高まった時期であった。「日曜休業」を掲げる彼らの運動は、「都市化、産業化、飲酒、リベラルな考え方、などといった問題が米国内にはいりこみ広がりつつあった」当時の社会に対して、「伝統的なプロテスタント・アメリカを守ろうとする“防御的”努力」であり、いわば世俗化への自己防御だった」といわれている⁽¹³⁾。もちろん、この『父の本』においても、敬虔なキリスト教徒の「父」となるべき助言書として、「安息日」は、他の世俗的なことを忘れ、「聖書の言葉」に向かい、神に感謝するように、「父」は「子どもたち」に諭すように助言される。教会や日曜学校に行くことも奨励されている。しかし、一週間のうちの唯一「父」が「家庭」にいられる一日であるがゆえに、この「安息日」が重要視されている、というのも確かである。

安息日は、よく制御された家族においては、宗教教育のための、最も特別な機会を与えるのだ。(87)

さらに、興味深い、というよりも「父」にとっては過酷ともいえるような、驚くべき助言がなされる。

子どもへの教育を効果的になすために父がもっている最良の機会とは、おそらくは、病気の時である。彼は病気の時、その仕事に邪魔されることはないが、家庭の団欒 (family circle) からは外されることはなく、反対に家族の間に残るように強いられる。そのために、彼らの性格をみたり、その考えや思いに対して指示を与えたりするような暇を見つけることができる。また、その病気がかなり深刻なものであっても、彼がその痛みや弱さを克服するという模範は、彼らに大きな影響を及ぼすであろう。子どもたちに、病気に対する考えや、それに堪える方法を、まるで彼ら自身が自分の人生を通して実践しているかのように訓練することを手助けするであろう。いまや病気とは、全ての者が期待することなのである。(62)

「家庭」にいられるときは、それが「病気」の時であっても、その少ない時間を有効に使い、あるい

は「病気」への対処の仕方でも模範を示すことで、「子ども」への「教育」に勤しむべきだということである。この助言は、「父」の「教育」意識の「強迫性」を示すひとつの証言であるといえるであろう。

3. 「家庭」にいない間の「父」の役割

とはいえ、「父」が「家庭」にいて「子ども」の「教育」に力を注ぐ時間は、あまりに少ない。従って、『父の本』では、「家庭」にいない間においても、「父」がその役割を立派にはたすことができるような考案と配慮がなされる。一つは、「父」がいない間の、彼の「日記の語りきかせ」というアイデアであり、もう一つは、周囲の「社会 (society)」を「子ども」にとっての「有用な (useful)」ものとするという配慮である。

一つめについては、次のようにいわれる。

たとえ数行であっても、それ〔父の日記〕が炉辺の会話に入れられたならば、いくらかでも利益はあるだろう。そのひとつが、父親の思いは、遠くにいる間でさえ家庭にあるということ、子どもたちがわかるということである。こうした文章〔父の日記〕は、容易に家族の中では教育のためのものとして変貌するであろう (154)

二つめは、第十三章「社会、その教育への影響」としてまとめられている。

全ての良い父は、教育の計画を作成する前段階として、社会についての知的かつ視野の広い見解を持つべきである。彼の子どもたちは、いくらかでも、それと関わっていかなければならない。彼らは、社会と離れて生きていくことはできないのだ。その人生を通じて、彼らは、多かれ少なかれ、他者と共感しつつ生きていかなければならない。彼らから知識を引き出すのみならず、社会について学んだり教えたりする方法はとでも多く、子どもたちは、社会そのものを観察することなしに、それについての念を受け取ったりコミュニケーションしたりすることは多くある。…しかし、子どもは、〔社会における〕事実というものに早くからそして永続的に印象づけられるようにするべきであると思う。それが、この国においては、子どもの教育にとって最も有益なことなのである。(161)

なぜ、「この国においては」なのか。それは、「この国には、他の多くの国においては、市民の間に多くの疎遠な関係を導いている」ような「階級や階層」がないとドワイトが考えるからである。アメリカ社会は、「全ての職業が全ての人に開かれている」ような「自由」な「社会」であるからである、というのである (161)。そのために子どもたちが、「社会」を生き抜き「有用な市民」となるには、その「社会」そのものと密接に関わっていくことが必要であり、不可欠である、とドワイトは説く。そして、「父」のなすべきことは、その「社会」を「子ども」のために「有用」にすることであると述べる。「父」は職場にいるので、「子ども」の「社会」との関わりに同席することができないからである。

父は思い起こさねばならない。彼が他のところで働いている間、社会は、しばしば彼の子どもたちに対して、その力を及ぼしているのだ、ということ。そして、彼にできることは、できる限りその〔社会の〕影響を子どもたちに有用である (useful) ようにする努力をすることである。(169)

具体的には、図書館やライセウム⁽¹⁴⁾、あるいは聖書協会や禁酒運動協会、伝道協会などの公的な集まりに参加し、あるいは家族の語らいのなかでそれを話題すること、あるいは近隣の人々への愛の精神を自らも実践することなどが、勧められる。

この「社会」改革の努力も、仕事によって「子ども」と関わることのできない代償に、「父」の役割を果たすべくされた要求であるといえよう。

Ⅲ. 「息子」の「教育」という主題

目次において明らかであり、またこれまでの分析によっても示唆されたように、この『父の本』において「父」が「教育」すべき「子ども」とは、主として「息子」である。冒頭の挿し絵にも「娘」は描かれており、文章中にも「娘」への言及はある。しかし、目次解説を一瞥しただけでも第七章には「父と息子の会話」、あるいは第九章に「少年の話」、第十章にも「若い男性の危険」とあるように、この書物では、「息子」の「教育」がその主題なのである。

アンテベラム期に主流であった女性による「母」への助言は、両性を対象とした「教育」を論じながらも「娘」の「教育」を中心とした言説に傾倒している⁽¹⁵⁾。それに対して男性であるドワイトの「父」への助言が、結果として「息子」の「教育」論を主に論じているという事実は、アンテベラム期の男女の人間形成像が性差によって強く規定されていたことを示しているのである。

1. 「有用な市民」と「神の僕」

アンテベラム期の望ましい男性像が、「有用性」と「リスペクタビリティ」であることは、前節において言及した通りである。従って、「父」が「息子」に期待する、つまりその「教育」において養成すべき重要な徳目は、この二つの鍵概念である。所々において、このキーワードが登場する。しかしこの二つは、「父」、つまり「大人」の男性に対するような並立的な使われ方をしていない。「リスペクタビリティ」に比べ、「有用性」は至るところで頻繁に使用され、「息子」が身につけるべき筆頭の美德としての地位を独占している。

〔教育についての書物は数多くある。〕しかし、ここアメリカ合衆国におけるキリスト教徒の父に、簡潔かつ知的な示唆を与えるような本はあるだろうか。この共和国においては、有用な市民—我々の国のような知的な社会において、持つべき最良の知識を携えているよ

うな男—と、偉大で神聖なる神の国における、忠実で、幸福で、受け入れられる僕となるような、知識や感覚や習慣を子どもに教育することが父に任されている。この方法について、父親たちに示唆をあたえるような本があるだろうか⁽¹⁵⁾。

つまり、「有用な市民」と「神の僕」となるべき「男性」を育てることが、「父」には求められているのである。

「リスペクタビリティ」についての言及が無いわけではない。「リスペクタブルな仕事がないということは、大人の男性と同様、子どもたちからも、我々が必要としているような、人生のなかで腹立たしく思うことからの避難所を奪ってしまうことになる」(103)。あるいは、「独立心」や「正直さ」、「金銭的にルーズでないこと」は、自分とその家族の「リスペクタビリティ」のために不可欠な要件であるともいわれている(184~185)。

しかしながら、「有用性」は、何にもまして強調される。「娯楽」についての第九章は、その目次解説に現われているように、どのような楽しい遊びも、この「有用性という目的」(108,109)に通じることのみが評価される。第十一章の「知的教育」においても、その知識の内容は、この「有用性」において論じられるのである。

多くの親が特別な学校に行くことや大学に行かせることを過大評価している。しかし、学問的な制度が企図しているような有用な知識を子どもたちの身につけさせるための、彼ら自身の力や、神の摂理が彼らの届く範囲においている機会を過小評価しているのは嘆かわしいことである。父親は、有用な真実について、自分自身が学んできたことを適確に判断し、それを備えている人を尊敬し、自らの行く手にあるものを求め、それを結集しなければならないのである。(132)

それぞれの年齢と性に応じて、季節にあった自然な楽しみを子どもたちにさせるべきである。それが有用な労働に適しているならば、その利益は倍増するであろう。(154)

あるいは、この「有用性」、「実際性」重視の考えから、ギリシャ語ラテン語の古典語教育よりも、「官僚」や「選挙の方法」、あるいは「公的なビジネスについての知識」、「公正」といった原則などの「共和国政府についての知識」を、「教育」するべきだともいわれる(158)。

要するに、「有用性」は、『父の本』において「教育」の根本原則なのである。

教育は、徹頭徹尾、有用であるべきである。有用性は、全ての主題、全ての段階において、その基準(measure and standard)であるべきなのだ。(205)

2. 「男らしさ」をめぐるジレンマと「父」と「息子」の絆の強調

以上のように、この『父の本』は、「有用な市民」と「神の僕」の育成によって「共和国家」の設立と維持を図ろうという、天下国家を論じた、つまり「公的」な事柄を扱ったものであるかのようにみえる。実際、要所要所の強調点においては、そうなのである。しかし、この書物の言説が「息子」の「教育論」に傾斜したのは、このような「共和国家」のためという大義名分とは若干ずれをもった実感ともいいうる感覚によるものであった。それは、以下のような言説において現われる。

凧上げは、…10歳から12歳ごろの少年に、あるいはもっと異なる年齢の少年にも勧めることのできる良い遊びである。それをつくることは、手先の器用さを要する。た風の力やその変化などの特性を、幼いものたちにわからせることができる。…〔ある父親が言う。〕「私は昔、自分のあげた凧が、空によって与えられた崇高さ、あるいはまた、それがあつた日の夕方、星の輝く頃まで糸を引っ張っていた時に、視界から消えたときに私を打ちのめした恐怖を思い出している。」私がここで、全ての少年たち望んでいるような印象というのは、このように様々な形で受け取られている。それらは度々生涯を通じてずっと続き、男らしさのなかにおいてさえ、とても有益なのである。

…ナイフは玩具としてだけではなく、心や精神を向上させるべき有用な経験と仕事とに方向かわせるものである。(98~99)

ここに懐古的な情景と共に描かれている「男らしさ」の形成は、『母の帝国』たるアンテベラム期のアメリカ社会で、男性たちが危機的に希求したものであった。当時の男性が抱え込まされたジレンマは、最近の男性史研究によって明らかにされた秘密儀礼結社の実態にも現われている。資本主義経済の担い手として、合理性、功利性を追求し実現することを期待されていた当時の中産階級の男性たちが、時代錯誤的な象徴性をもったフリーメーソンなどの女人禁制の秘密儀礼結社に、驚くほど多く加入していたのである。この事実注目したM.カーンズは、以下のようにいう。

…ヴィクトリア期のアメリカの若者たちのジレンマとは、ただたんに父親が不在で、その結果、息子が自分の核心となる男性らしさを身につけるための心理的先導者を得られない、という問題だけなのではなく、大人の性差による役割というものが不変の、しかも偏狭な定義づけをされているところへもってきて、息子たちが主として教え込まれたのが女性の大人と結びついた感受性や道徳的価値観だった、ということでもあった⁽¹⁶⁾。

このジレンマは、「息子」たちのみならず、その「息子」たちを前にして「父」が抱えたものでもあった。『父の本』において「父」が抱え込まされた危機意識は、「共和国家」の存亡という「公的世界」(=「男性の領域」)のものであると共に、その名のもとにあるのは、このような「家庭」の「教育」における、「性別領域分離主義」がもたらした「自己」感覚のゆらぎやジレンマ、あるいは破綻であっ

た。

「少年たちのための最良の玩具」として、先の引用で触れた「ナイフ」の他に、「機械物」「ハンマー」や「木槌」「鋸」「釘」などの「ハンディクラフト」、あるいは「鋤」「鍬」などの「農具」が紹介される(102)。「父」は「息子」に「自然の知恵」を与えることが必要であり、「植物学」や「動物学」、「鉱物学」を駆使しつつ教えなければならない、ともいわれる。(105)

このような助言の過程で、その言説に現われるものは、それらの知識や技術の習得によって得られる「有益性」というよりも、先の鳳上げの場面で描かれたような、懐古的かつ牧歌的な「少年の日の思い出」とも言いうるものなのである。

少年たちは、さまざまな商売や、活発で有益な仕事に従事することを許されるべきである。そこからは、予想より多くのものを得ることができるだろう。この主題についてただ話しをするだけで、父たちのなかには、多くの楽しい良き日の思い出を思い起こす人も多いと思う。少年たちは、旋盤工や大工や石工や石切り職人などの横に立っているだけで、想像をはるかに超えた楽しみを得ることはしばしばなのである。ただ工場の中でロフトの周りを見ているだけで、あるいは人里は慣れた小屋の中で機織機が動いているのを眺めているだけでも、なんて楽しい時を過ごすことができるであろうか。また、春の晴れた朝、網を投げている漁師の姿を見守ったり、獲物がなかったことに喜んだりすることだけでも、彼らは好きなのである。あるいは、人の踏みこんでない畦道を農夫の後について歩いたり、彼の収穫物や季節についての知恵を聞いたりすることが、好きなのだ。(108)

「男らしさ」というものが、このような懐古的な文章でしか表わすことのできないことは、当時の少年が「男性」としての「自己」をもって育っていくことの困難さを表わしているといえよう。『父の本』の言説において、アンテベラム期に「女性の領域」と対比させられたとされるような「男性の領域」は、はっきりと明示できるようなものではなかった。それどころか、次にみるように、ここで「父」によってなされるべきとされる「教育」とは、当時の「男性の領域」とは全く相容れない、「母」に期待されていた「愛」を基調とするような様態をなしているのである。

IV. 「愛による教育」と「父」の脆弱性

1. 「愛」への全面的信頼と「父」の不確かさ

この書物において「父」に期待される「教育」の様態は、「キス」(38)に象徴される、媚態とも思える「愛」へ全面的な信頼である。

アンテベラム期の「愛による教育」の喧伝は、この時期の子育てが「母」に期待され、女性たちもまたそれに追従した、あるいは自ら追求し奨励した、という歴史的事実によって説明されてきた⁽¹⁷⁾。しかし、この「母」に任せっきりになっている「家庭教育」を「父」の手に取り戻そうというこの『父の本』において、当時において女性の領分とされていた「愛 (love あるいは affection)」という様態

を、「父」による「教育」はそのまま踏襲するのである。

良き父は、彼自身の家庭という帝国 (his whole domestic empire) について調査し、そしてそれが自らが望んだ通りにおかれているのを見るとき、とても興味深い考えが心に浮かんだ。「ここは、私が子どもたちを知恵と善良に向かって訓練するように定められている場である。彼らは、私の指示や模範によって人生を通じて永続する性格を、ここで受け取るのである。ここで私は、人類への愛を見せなければならないのだ。…彼らはここでお互いに愛することを学ぶのだ。…彼らは、私によって、信念の堅固さと愛をもって支配されるのだ。」(29)

あなたは疑いなく子どもたちを愛している。あなたは、子どもたちが徳と知性を与え、尊敬され、幸福になるように望んでいるのだ。(212)

ただ、『父の本』において、復権をかけるべき「父」が不確かなものとして現出するのは、つまりその脆弱性をみせるのは、「教育」の様態が「愛」を基調にしていることによるのではない。カーンズが指摘したような「男らしさ」をめぐるジレンマを、この書物がそのまま「父」への助言としてはからずも言説化していることが、「父」の位置の不確かさを表わしているのである。

「愛」を基調とした上記のようなトーンをその中軸にしつつも、「男らしさ」の規範は所々に顔を見せる。当時の「男らしさ」の規範を、「父」は「息子」に伝授するべくして語られるのである。それは、まずは先に引用した懐古的な「父」と「子」の絆を強調する場面にも現われている。そして、以下の箇所に、それはより明確に示されるのである。

自分の感情をコントロールできるということを信じることは、全ての人の生涯にわたって良い結果を生むであろう。…〔自分の感情を制御できないという困難な性格をもった〕少年がこう言ったのだ。「僕が最初に怒りを感じたとき、僕は誰も恐くなかった。もしお父さんが僕の前に立ったとしたら、僕はお父さんを殴ってしまったかもしれない。それは僕の生まれつきのものなんだ。僕のお父さんもまさに同じだったんだ。」この少年は、数年のうちに、普通の自己管理の力があつたなら防ぐことができたような罪によって、墓場に送られたのである。… (123)

「息子」が危険な墮落に陥ることなきように、「自己制御」、「自己管理」という徳を身につけさせるべく、「父」は「息子」への「権威」と「支配」の力を行使しなければならない(128)というのである。しかし、この少年の言葉が如実に語るように、それは、「父」自身の「自己管理」の模範的態度こそ、かかっている。

「自己管理」「自己制御」の規範は、チャイルドのような女性の言説にも多く現われており、男性のみが持っていたものではなかった。しかしそれらは、女性が「従順さ」、あるいは「自己犠牲」を規範

とされていた一方で、アンテベラム期の「男らしさ」を規定する重要かつ不可欠な規範であった⁽¹⁸⁾。この「男らしさ」を「息子」が持つことができるようにするには、そしてそのことによって「父」が「息子」への「権威」を行使し保持するには、自らが「息子」の鑑となって、「男らしく」なければならない、とドワイトは語るのである。

このような「父」が、その「教育」における中心的な方法を、ドワイトは「愛」という様態に求めた。これが混乱し錯綜したメッセージであることは、明らかである。「父」が「愛」をもって「子ども」の教育にあたるということが、「父」としての弱さを表わしているというのではない。そうではなく、この『父の本』において望ましいとされている「男らしさ」を「息子」に伝授する鑑としての「父」、「リスペクタビリティ」を体現するはずの「父」による「教育」が、当時の「女らしさ」の中核たる「愛」をもって語られる。このことが、この『父の本』における「父」の不確かさを露呈しているのである。

2. 実際活動における「母」への委託

「父」の不確かさは、その「教育」方法にのみ現われていたのではない。それは、より明確に、「教育」の実際活動の場面の助言において露呈する。そこにおいて、「父」は、「子ども」の前から姿を消すのである。といっても、「父」にその望ましい姿を助言する文章においてではない。そのような助言やその原則を読者にわかりやすく説明し例証するために、所々に挿入されるエピソードにおいて、「子ども」と向き合うのは、なぜか「母」なのである。もちろん、全てのところでそうなのではない。しかし、幼児に「宗教教育」を会話によって施す(59)とき、幼児が「最初の笑み」の表情を浮かばせたときに「喜びの声」をあげる(68)とき、聖書を「読み聞かせる」(75)とき、「子ども」に「祈り」の言葉を教える(77)とき、そこにいるのは「母」である。つまり、ある原則を説くために良いとして選択されたエピソードにおいて、「父」は、しばしばその「教育」の座を「母」に受け渡すのである。

この『父の本』が、「子どもの世話」が「母」任せになっていることに苦慮し、「父」にその仕事の重要性を自覚させようとして書き起こされたものであることは、冒頭に述べた通りである。その書物において、筆者は、うかつにも、「教育」の実際活動を「母」に行わせている。それが頻繁であるということは、ドワイト自身がそれに自覚的であったか否かは窺い知れないが、「父」の座の不確かさを、はからずも言明してしまっている。このことは、「家庭」のなかで「息子」の「教育」という役割を果たすべくして主題化された「父」という存在が、当時の一般的な、暗黙の前提ともいべき意義において、非常に希薄なものであったことを意味しているのである。

おわりに

『父』の本における「父」の存在の不確かさとその「強迫性」は、「共同体的・オイコス的権威」という後ろ盾を失った西欧近代の「父」の抱えた矛盾とジレンマ⁽¹⁹⁾の末路的な姿を如実に言い表してい

るものといえよう。

『父の本』における第一の主題は、「息子」にいか「有用性」を身につけさせるかということである。これは、アメリカというキリスト教共和国家において「市民」としての役割を果たすことのできるような男性の形成という時代の要請を受けている。このような、「市民」の育成という公的関心を前面に掲げながら語られる、その「父」による「息子」の教育論において、その言説はジレンマを抱え込んでいた。

一方で、当時の性別領域分離主義の下で喧伝されていた「男らしさ」の規範において、「父」は「息子」の鑑となることが要求される。しかしまたその一方で、子育てに関するその「父」への助言において、最も信頼を置かれている方法は、当時の性別領域分離主義でいえば「女性」、すなわち「母」の領域に包摂されるような「愛」という様態なのである。そして、それはチャイルドやシガニーら女性による、葛藤を含んだ言説とは異なり、ほぼ全面的な信頼のもとに書かれているのである。M.カーンズが指摘したような、「男らしさ」をめぐるジレンマ、つまり「女性的」な育児文化のなかで「男らしさ」を身につけなければならないというジレンマに、著者ドワイトはおそらくは無自覚であったといえよう。しかしながら、このジレンマは「父」への助言の言説が書かれる過程において、ゆらぎやずれとなって現出するのである。

「息子」の鑑としての「父」の座は、子育ての方法意識に関して、不確かなものとなっている。「愛」という様態をその基調としているからである。そしてそれのみならず、実際の子どもの関わり場面を描く叙述において、一層のゆらぎをみせる。「父」への助言を読者にわかりやすく例証するために挿入されたエピソードにおいて、実際に子どもと相対するのが「母」であることが度々なのである。

『父の本』における「父」の語られ方とそこにみられる葛藤やゆらぎの構造は、『母の帝国』とまでいわれるほどの「母」中心の家庭教育意識の高まりのなかでの、「父」の位置、存在のあり方を示すひとつの基点であるといえよう。そしてまた、当時においては唯一といってよいほど稀少な「父」向けの助言書であるこの書物が、他の女性向けの助言書群に比べて、それほどの読者を持たなかったことは、当時の男性たちにおいて、『父の本』に書かれたような「父」となるべくして努力しようとするような意識が極めて薄かったことを物語っている。それはこの書物が、公的な関心を織り込みながらもやはり、家庭教育という、当時の「男性の領域」とは相容れない事柄を論じるジャンルの書物であったということも影響していよう。ドワイトが論じたような危機的な状況、その「父」言説にみられるような「強迫的」感情やジレンマ、そしてそれを克服して新たなる「父」を「再定義」していこうとする志向性は、「父」であるような、そして「父」となるような大人の男性たちには共有されなかったといえることができるのである。

注

- (1) Ryan, M. P., *The Empire of the Mother: American Writing about Domesticity, 1830-1860*, Harrington Park Press, 1985 (originally published by The Haworth Press, 1982); 日野淑子「アメリ

カ母子関係史の課題—アンテベラム期に関する諸論を手がかりに—」『東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室紀要』第20号, 1994年; 野々村淑子「南北戦争前ニューイングランドにおける家庭教育書・育児書の氾濫と〈母〉の主題化」『大人と子供の関係史 第2論集』大人と子供の関係史研究会, 1996年

- (2) 本研究では, 第二版を使用した。初版は1834年に出版されている。
- (3) アンテベラム期の「男性の領域」については, 1960年代から進展してきた女性史研究において明らかにされてきた「女性の領域」に対応し, 1980年代後半より研究が活発化している。先駆的研究として, ロタンドの研究 (Rotundo, E. A., 'Body and Soul : Changing Ideals of American Middle-Class Manhood, 1770-1920', *Journal of Social History*, 1983, Summer) が挙げられる。「女性の領域」の研究史については, 日野淑子, 前掲論文 (1994年) を参照。
- (4) アンテベラム期の「母」礼讃現象の背景については, 注1に挙げた各論考を参照。
- (5) 留意しておくべきは, 『母の帝国』とは, 実際の子育ての場面での現象ではない, という点である。あくまで, 当時「氾濫」をみせていた「家庭的著述」というジャンルの言説の世界において, 「母」の役割が称賛され, 礼讃されたのである。従って, 当時の母親たちが, 言説上にみられたような「家庭」において子育ての役割を, 実際に発揮していたということではない。
- (6) Frank, S. M., *Life with Father: Parenthood and Masculinity in the Nineteenth-Century American North.*, The Johns Hopkins University Press, 1998, p.22
- (7) 寺崎弘昭「一八・一九世紀イギリスの父親像—その強迫性と不安—」比較家族史学会監修, 黒柳晴夫・山本正和・若尾祐司編『シリーズ比較家族 第Ⅱ期 2 父親と家族—父性を問う』早稲田大学出版部, 1998年。
- (8) *Dictionary of American Biography*, edited by Allen Johnson, Charles Scribner's Sons, New York, 1928 (Copyright by American Council of Learned Societies)
- (9) Ryan, *op. cit.*, pp.20-21 ライアンは, アンテベラム期の「家庭的著述」を派生順に三つのタイプに区分した。第一波が, 『父の本』を含む, 男性の聖職者や知識人による「家庭」教訓書群である。第二波は, 彼らの姉妹, あるいは娘たちによる, 実用的な助言書である。そして, ほぼ1830年代半ばを境に, 第三波が新しく出現することになる。それは, 女性読者をターゲットにした「感傷主義」的な詩や小説を中心とした言説群であり, 女性作家たちがベストセラー作家として活躍した。産業化の波に伴って新しく成立した印刷業や書籍販売業の男性たちは, 彼女たちの作品を雑誌や書籍に載せ, 自らも女性向けの作品を執筆し, 自らの事業を拡大していった。第二波の著作については, 日野淑子「リディア・マリア・チャイルドにおける娘の教育と〈母〉—アンテベラム期アメリカの家庭教育書・育児書をめぐり—考察—」(『東京大学教育学部紀要』第34巻, 1994年) を参照。また, 第三波の著作については, 野々村淑子「19世紀アメリカの家庭教育書と男女の領分—S.G. グッドリッチ『炉辺の教育』(1838) に描かれた子どもへのまなざし—」『九州大学教育学部紀要 (教育学部門)』第43集, 1998年, および同「19世紀アメリカにおける女による〈母〉礼讃言説と〈教育〉—リディア・ハントリー・シガニー『母への手紙』

(1834)をめぐって—』『九州大学大学院教育学研究紀要』創刊号(通巻第44集),1999年を参照。

- (10) アンテベラム期の「家庭的著述」の「氾濫」現象の注目すべき特徴は、「母」礼讃言説を中核とすることともに、読者としても作者としても女性の関わりが大きかったことである。前注で述べたライアンの整理において、第二波と第三波は女性を読者として想定して書かれたものであり、多くの著作は女性によるものであった。そしてそれらは、女性の関わりが薄い第一波の書物群にくらべて、種類も数も多く、多くの版が重ねられた。このことは、女性による女性のための書物群が主流であったことを示している。

まず、アンテベラム期に女性の読者層が増大し、「感傷主義」的文学の流行を支えたのは、新興中産階級という新しい社会構成体の成立と相俟ったものである。中産階級であることの一つの、そして最も明確な指標は、夫が「ホワイトカラー」の職種に就き、妻子を養うだけの稼ぎを得ていることであった。従って、中産階級の妻は、読書にいそしむだけの教養と閑暇をもつことができた。読書行為それ自体が、当時の女性たちにとって、中産階級としてのステータスシンボルを身に纏うことを意味していたのである。それと同時に、彼女たちが読むべきとされていたジャンルが、「女性の領域」を超えない「家庭的著述」であったことは、あるべき中産階級的「家庭」像をそこから習得する手段でもあった。

そして、このような女性読者ととともに、彼女たちが読むべき書物群を生産する女性作家たちが数多く出現した。それは、聖職者の支配力の衰退のなかで文化の形成主体が女性にシフトしていった過程においてのことであったということが出来る(Douglas, A., *The Feminization of American Culture*, Anchor Books, 1977)。しかしながら、女性作家は、書物を書き出版することで経済活動に関与することになる。大方の場合、彼女たちは金稼ぎのために作家になった。書く内容は「女性の領域」であったが、出版して収入を得るという行為は「男性の領域」とされているものだったのである。このことが、女性作家たちの抱えるジレンマであり、それは言説においてずれや葛藤となって現出するのである(日野淑子「リディア・マリア・チャイルド…」(前掲論文,1994年),野々村淑子「南北戦争前…」(前掲論文,1996年),同「19世紀アメリカにおける女による…」(前掲論文,1999年))。ドワイトのような男性作家は、このジレンマをそのまま逆の形で抱え込むことになった。すなわち、書いて出版するという行為は「男性の領域」であったが、「家庭」のなかでの教育という、その内容は「女性の領域」とされているものである、というジレンマである。

- (11) Frank, *op. cit.*
- (12) 中山章「ヴィクトリア期のジェントルマンとリスペクタビリティ」村岡健次他編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房,1987年,222頁。アメリカについては、久田由佳子「アメリカの家族史研究」若尾祐司編著『近代ヨーロッパの探究② 家族』ミネルヴァ書房,1998年,116頁。
- (13) 村上良夫『終末・予言・安息日—19世紀アメリカとエレン・ホワイトの安息日論』新教出版社,1998年,134-141頁。

- (14) 「ライセウム (lyceum)」とは一般的には「講堂, 文化会館」という意味である。アンテベラム期のアメリカでは, 公会堂のような集会所でレクチャーを聴くという文化交流の場が流行しており, これを「lyceum」といった。Bode, C., *The American Lyceum : Town Meeting of the Mind*, Oxford U. P., 1956
- (15) 日野淑子「リディア・マリア・チャイルド…」(前掲論文, 1994年), 野々村淑子「南北戦争前…」(前掲論文, 1996年), 同「19世紀アメリカにおける女による…」(前掲論文, 1999年)
- (16) マーク・C.カーンズ(野崎嘉信訳)『結社の時代—19世紀アメリカの秘密儀礼』法政大学出版局, 1993年, 211頁 (Carnes, M. C., *Secret Ritual and Manhood in Victorian America*, Yale U.P., p.114)。
- (17) 日野淑子「アメリカ母子関係史の課題」(前掲論文, 1994年)を参照。また, 田中智志「愛ふれるペダゴジーの誕生—愛という権力の装置」同編著『ペダゴジーの誕生—アメリカにおける教育の言説とテクノロジー』多賀出版, 1999年。
- (18) Rotundo, *op. cit.*
- (19) 寺崎弘昭, 前掲論文。

The Fragility of Fatherhood in Ante-bellum America
— Theodore Dwight, *Father's Book*, 1835 —

Toshiko Nonomura

In Ante-bellum (before Civil War) America, a great deal of discourses admired motherhood were created and read by many women. This phenomenon is called “The Empire of the Mother” by Mary P. Ryan, a historian about American Women.

This paper aims to clear what and how fatherhood could be in the phenomenon. *Father's Book*, by Theodore Dwight, was perhaps only one famous advice book about education for fathers in the period.

It told father to “be careful not to underrate his own duties of influence” to his children, “although so large share of the care of children devolves upon the mother”. But in spite of Dwight's hope, this book had little readers. Many and various advice books for mothers had many readers. This explains men in the era had little interest in the role of father.

The main subject of *Father's Book* is how educate sons to be “useful” as an American citizen. Dwight says father can be “respectable” through being a model to his son. So father must be “ideal man (in the era)” forward his son. But most strong mode of education in this book is “love” and “affection”, included in this era's “women's sphere”. Furthermore, in some important practical scenes, the educator is a mother, not a father.

Modernization means for fatherhood the process of loss the power authorized by pre-modern community. The fragility and obsession of fatherhood in *Father's Book* are a phase of dilemma or paradox of modern fatherhood in America.